
Drive

Lucy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Drive

【作者名】

NZコード

N6969F

【作者名】

Lucy

【あらすじ】

4人の誘拐犯と人質となつた予備校生の話。

【1】ハジマつ的话（前書き）

ちょっと暗めな話になるかもしれません。なんとか最後まで書きた
いと思います。構想は最後まで一応考えてあるのであとは上手く矛
盾のないよう書き上げるだけです。読んで頂ければ幸いです。

【1】ハジマツの電話

「最後におさらいだ。ターゲットはヨドガワ電機社長淀川源次の息子、淀川吹雪18歳。予備校生。3人兄弟の末っ子でかなりの甘ちゃんだ。」

「予備校生つてことはそこまで勉強できる奴、キレる奴じやないつてことつすよね？」

「まあな。だが油断は禁物だ。末っ子で甘えん坊つてことはそれだけ溺愛されている、つまり警護がきついということもある。」

「その辺は大丈夫です。ここ2週間張つていましたが、ターゲットに警護はついていません。平日は10時から18時まで予備校にあります。帰宅後は特に自宅から出る形跡はありませんでした。休日は自宅にいるか友人と遊ぶぐらいで、目立つた奇行はありません。」

「友人？ありやどうみても彼女でしちう！」

「まあどちらにせよ、誘拐するにはターゲットが一番最適な人物に違いありません。ロジャー。」

「ご苦労だったな。アーサー。あとは運転の方をよろしく頼んだぞ。」

「ルートは完璧です。ご心配なさらず、任務の遂行を最優先にお願いします。」

アーサーと呼ばれた男は白い小型トラックに一人乗り込み、バッタミラーやラサイドミラーをいじくり、ガソリン、バッテリー残量を確認し、ワインカーをつけては車から降り、ライトの確認を怠らない。雨が降つていないにもかかわらずワイパーを作動させ、正常かどうかを確認する。ブレーキランプを仲間たちに確認させ、彼は小さく頷いた。彼は安全運転を心がける人間であるという理由は多少あるかもしない。だが、彼らの作戦は天候にも警察にも左

右されてはいけないのだ。その為、万全の体制で挑まなければならない。車の不調で停止したり、ライトが切れて警察に指導された時点で彼らは終了する。

「よし。時間だ。ハリー、ジユード、くれぐれも慎重にな。」

「騒ぎ立てたら自分が口を塞げばOKですよ。あんなひょろいの片手で充分ですわ。」

「筋力しか取り柄のないジユード君にはうつてつけだな！おいらはとにかく人がこないかを見張りませ。」

3人はトラックに乗り込み、ターゲット出現地点へ向かった。

「しかしロジャー。なぜトラックなんすか？ワゴン車にすりやトンシーバなんて使わずにアーサーと連絡取れるじやないっすか。」

「まあな。ところでハリーよ。アーサーの弱点は何か分かるか？」

「うーむ。人前に立つとキヨドるつてここですか？」

「それもあるがな。奴は周囲に人がいるとイラつくというか、集中力を欠く習性があるんだ。とくに後ろに人がいるととにかく落ち着かない。奴には運転に集中させたい。だから緊急のとき以外、奴と連絡を取るのは避けたい。それにはトラックの方がいいって思つてな。」

「ほおー。さすがつすね！」

「神経質な奴は俺には理解できませんわ。」

「アーサーとジユード君は一生分かり合えないな。」

4人を乗せたトラックは閑静な住宅街へと入つていく。この近辺は勝ち組と呼ばれる著名人が多く住み、特にその中でもヨドガワ邸の大きさは異彩を放つていた。この土地に居を構えるだけでも莫大な金がかかるのだが、神社の鳥居かと見紛うほどの門に、森かと思うような木の多さ、その木々の隙間からちよろちよろと屋敷の屋根

が見える。これほどの金持ちであれば予備校へ行くにしろ当然高級車での送り迎えがあるはずだと思うかもしれない。しかし、そこは淀川源次の哲学で、若いうちは人並みの生活を送って欲しいという願望があった。彼自身、幼少からここに住んだ結果の答えなのだ。それはヨドガワ電機入社式で毎年語っているので、寝ていない新入社員以外は全員耳にしたことがあるのだ。『貧乏は貧乏なりの、金持ちは金持ちは金持なりの苦悩がある。自分がなぜこんな目に?』と思うのは間違いだ。皆それ相応の苦悩があり、その苦悩を客観的に見ることで人は簡単に変わることができる。視野を広く持て。グローバルな視野を持ち続けてこれたことで、我々は長年日本を代表する企業となりえたのだ・・・』と、ありがたい社長の哲学を1時間も聞けるのだ。

「やつぱりあの言葉は嘘だな。」

「あの言葉ってなんすか?」

「淀川の訓示だ。貧乏は貧乏なりの、金持ちは金持ちは金持なりのつて奴だ。」

「元係長とは思えない発言つすね。それでどの辺りが嘘と?」

「今はただの犯罪者だがな。あの言葉の全てが嘘だ。貧乏人は金持ちになるには多大な苦労を強いられる。だが金持ちは貧乏人になるには簡単だ。使つてしまえばいいんだからな。持つ者持たざる者の関係だ。所詮生まれたところが全てなんだよ。淀川源次が何をしてきたんだ?父親の築き上げた遺産をただただ守っているだけだ。優秀なのは奴じやない。創設者淀川源栄と社員達だ。その社員をまずリストラするつてのは奴の言うグローバルな視野つてのがまがい物だつていう証拠だろ。」

「・・・俺たちのことつか。」

彼らが生きている時代はまさに就職難と呼ばれる時代、いわゆる氷河期である。この時期に首を切られるということは死ねと言つに等しい。大企業ですらこれなのだから、中小企業は田を覆わんばかりの状況だ。ホワイトカラーの戦士達は藁をもすがる思いで会社にしがみつく。そんな価値もない会社がほとんどなのにもかかわらず・・・。

ロジヤーと呼ばれる男は元ヨドガワ電機の家電部門の係長であつた。部下はアーサー、ハリー、ジュードの3人。年齢的にはアーサーが一番上なのだがロジヤーは上手く立ち回れる男だつたため、アーサーよりも早く昇進した。給料はさほど上がらなかつたが、ここで終わる男じやないという社長のげきなのだろうと解釈し、強引に納得していた。誰よりも会社に尽くし、誰よりも働いたという自負はあつた。だが、たつた一度の発注ミスで彼は部長に田をつけられた。時期が悪かつた。全体的に業績が落ちていた。彼は解雇者リストに名が挙がり、1ヶ月後首を切られた。自主退社扱いとなつたため、退職金は貰えたが、彼は納得がいかなかつた。金額ではない。こんなにも会社に時間を吸い取られ、ストレスと疲労で何度も倒れかけた末の会社からの答えがこれだつたからだ。そしてこんな会社に今まで忠誠を誓つていた自分への馬鹿馬鹿しさに嫌気がさした。結婚を約束していた相手にも見放された。家族からは早く次を見つけるとせかせられた。金を貸してくれる友人なんていやしない。この数年会社仲間としかつるんできなかつたツケがここにきた。文字通り、彼は会社に全てを榨取された。果ては会社という物の存在 자체に疑問を感じるようになつていた・・・。

「この世の中に一体どれほどの会社が忠誠を誓つほどの価値を持つのか。

やがて彼はニートになつていった。ひたすらにタバコを吸い、ひたすらに眠り、ひたすらに引きこもつた。酒には手を付けなかつた。彼の中で酒は会社を連想させるものだからだ。彼はアルコールが強いわけではなかつた。だが社会の一員としてちよつとは飲めるようになれとの父親の薦めで飲み始めたにすぎない。家にいれば自主的に飲むことは決してない。彼は酔っ払いの存在にも嫌気がさしてきていた。

やがて彼の思考はどどまることを知らなくなつて行く。

会社とは何か、
社会とは何か、
幸福とは何か、
生きるとは何か、
死とは・・・。

そんな路頭に迷い込んだ時、一本の電話がかかってきた。これが幸か不幸か彼の人生を大きく変えることになつた。

【2】実行（前書き）

「前回までのあらすじ」
リストラされた4人が会社への復讐として社長の息子を誘拐しよう計画した。リーダーであるロジャーは会社からあらゆるものを探取され、その恨みを原動力として会社、そして社会に対して復讐をすることを心に刻んだ。

【2】実行

「リストラする前にまずトップが責任を取るべきですよ。おかげでアリスちゃんに会つ機会もめっぽつ減つちやつたんですよ! ひどいですよね。」

「お前まだあの子に搾取されてたのか。」

「搾取つて言い方はないつですよ! アリスちゃんはお金が無いから仕方なくあやこで働いているんですよ。」

「「くえー。」「

ロジヤーヒジューードモーた始まつたと言わんばかりの表情でハリーを見た。

「そりそり足を洗えよ。もう貯金もないんだろ?」

「やうなんすよー。おかげで消費者金融から金を借りないと生活できなくなつたんすよ。」

「お前まさか借金してゐるのか!?」

「はい。50万ほどですかり問題ないつですよ。」「

「この人生は終わったなとロジヤーヒジューードモー田で会話をした。

やがて車は路肩に止まつた。ヨドガワ邸の屋根がちゅうりつと見える。彼らはヨドガワ邸の門から約100m離れた場所に停車した。

門前ではあからさますぎるし遠すぎても本人の確認ができなくなってしまうため、適度に距離を置いて停車する必要があつた。

「予備校に着く時間が大体9時55分。通学時間が大体12分。普通なら10分からないほどなんだが、ターゲットは必ずコンビニへ立ち寄る。そのため家をでる時間は大体9時43分。現在9時33分。ちょっと早い気がするがイレギュラーを考えると丁度いい。「あんまり早すぎても人目に付いて危険ですからね。」

「ロジヤー。聞こえますか。ロジヤー。」

「聞こえるぞアーサー。どうした?」

「門前に人影が見えます。一人のようです。」

ロジヤーはジューードに確認させた。

「本人じゃないです。女のようです。」

「女?」

「あー門が開きました!」

「ロジヤー。これは最悪の展開かもしません。」

「あー本人が出てきました!あの服間違いありません!見覚えがあります!」

「・・・どうやら、ターゲットの友人のようですね。」

「いやいやだからありや彼女ですって。って言つてる場合じゃないつすね。どうしますか。」

「ロジヤー。今日は諦めましょう。これは完全なるイレギュラーです。明日でも実行は可能かと。」

「・・・いや。ダメだ。今日の実行に変更はない。」

「しかし・・・」

彼は恐れていた。しかしその恐れの原因は作戦の失敗ではない。また元の自分に戻ってしまうと感じたからだ。生産性のないニート生活は、仕事人間だつた彼を心底攻撃し続けていた。やつと得た救いをここで逃すわけにはいかなかつた。彼らの作戦が成功したとしても彼らの未来は真つ暗であろう。だが彼はそれでもいいという信念を持つてこの作戦にあたつていた。あの淀川源次に一泡吹かせることで会社への復讐、そして社会への復讐となるのだと考えていた。それが達成されれば死すらも厭わない、牢獄程度なら安いものだと。

「わかつた。実行犯は俺が行く。」

「お言葉ですがロジャー。自分が腕力に関しては勝つていると思いますが。」

「ここで腕力を出されたら女に悲鳴を上げられて万事休すだ。腕力は使わない。説得でいく。」

そんなやりとりをしているうちに、ターゲット達は50mまで迫つていた。

「アーサー。すぐ出発できる準備をしておいてくれ。失敗したと思つたら俺を置いて逃げる。」

そう言つてロジャーは車を降りた。他の3人はロジャーの意氣込みに圧倒されると同時に、彼のこれまでの見えない苦労を垣間見た気がした。

ロジャーは一歩一歩と歩き、やがてターゲット達と接触する。

「すみません。」

「？」

ターゲット達は立ち止まつた。

「私、帝都大学病院の松下と申します。」

「はあ。」

「淀川吹雪様でいらっしゃいますよね？」

「そうですが。」

「お父様の淀川源次様の息子さんでいらっしゃいますよね？」

「それが何か？」

「はい。大変申し上げにくいことなのですが実は・・・あ。そちらは妹さんでしようか？」

「いえ。友人ですが？」

「友人の方でしたか。すみませんがお父様のプライバシーに関わることなので少々外していただけないでしようか。」

「・・・。ごめん。先にコンビニ行って。」

友人の女は分かつたとだけ言い、先にコンビニへ向かつた。

「ご迷惑をお掛けして大変申し訳ございません。」

「父が病院に通つてているなんて初耳なんですが？」

「はい。お父様からも誰にも言つたと言わされておりまして。しかしこれはご家族の方に知らせておかなければならぬ事態だと、そういう思いまして。」

「・・・。そんなに悪い病気なんですか？」

「はい・・・。お父様は大変なヘビースモーカーでいらっしゃいます。それが影響して肺にガンを・・・」

「・・・。そうなんですか・・・。それは、治らないんですか？」

「発見が遅かつたので手術しても既に手遅れの状態でして・・・」

「・・・。長くて何年になるんですか。」

「もつてあと半年です。それを伝えてもお父様はタバコをお吸いになられるのでそれも厳しいかと・・・」

「・・・それは、僕のほかに誰かに伝えてますか？」
「いえ。まだあなた様にしかお伝えしておりません。」

「そうですか・・・。」

「それでですね。もう少し詳しいお話をさせていただきたいので、

当病院まで来ていただけないでしょうか。」

「・・・分かりました。それでは母も一緒に聞いたほうがいいです
よね？呼んできます。」

「お父様からお母様には特に内密にするよう言われておりますの
・・・本来であればあなた様にも決してお伝えしてはいけないのです。
お父様からあなたの話は常々伺っております。ご兄弟の中でも特に
可愛がられているあなた様にだけは、私の医師人生をかけてでもお
伝えしなければと思いまして。」

「・・・分かりました。お話は僕一人で伺います。」

「ありがとうございます。あちらに車を待たせてありますので是非
ご一緒に。」

「はい。・・・あ、友人がコンビニに待たせたままなのでちょっと
電話します。」

ターゲットは友人に簡潔に用件を伝え、電話を切った。

「あの車ですか？なんか野菜を運ぶ車みたいですね。」

「お父様は大変勘のするどい方であられるのは幾度とない問診で既
に承知しております。今日も白衣でなくこうして私服でないと、勘
付かれる可能性があるので。」

松下医師はふいに手を上げた。

それと同時に2人の男が車の後ろから出てきた。

予備校生の青年は松下医師に口を塞がれ、
そして3人がかりで車に強引に乗せられた。

「アーサー！ いけ！」

その声を合図に、白い小型トラックは発進した。

【3】革命（前書き）

リストラされた4人が会社への復讐として社長の息子を誘拐しようと計画した。入念に準備された誘拐作戦はいよいよ実行されたのだ
つた・・・。

【3】革命

「はい。品川です。」

「もしもし。赤坂です。」

「おお。久しぶりだな。そつちはどうだ?」

「まあ、なんというか・・・それより品川さんはどうなんですか?」

次の就職先はまだ決まっていないんですか?」

「痛いところつかないでくれよ。なかなか厳しいもんだよ。」

「そうですか・・・」

「立川たちも元気でやつてるか?」

「・・・。品川さん。ちょっと聞いてくれますか?」

赤坂の話によると、新しくきた係長が社長の「ネでその地位にいるため、全く管理能力がないこと、給料も以前より20%も下げられたこと、休日も格段に減つたこと、特に品川の直属だつた立川と大田に対し、あからさまに強くあたるのだという。もう我慢ならないといった表情が電話越しからでも伝わってくる。

「なるほど。そいつは理不尽だな。」

「自分は品川さんの直属というわけではないのでまだましなんです
が・・・。それでもこれは明らかに不当ですよ。」

「その新係長さんにはその不平は伝えたのか?」

「はい。しかしこちらが何か言つとすぐ用を思い出したからまた後
で、と逃げるんですよ。」

「うーむ。」

「それですね。昨日立川と大田が係長を逃さないよつて囲んで不
平を訴えたんです。そしたら係長が突然、

『お前たちは解雇だー。』

つて言い出しまして。』

「なんなんだそいつは。お子様すぎるだらう。』

「ええ。そこへタイミング悪く社長が現れましてね。係長の奴あることないこと社長に言つたらしいんですよ。立川と大田について。』

「それでどうなったんだ?』

「立川たちの言い分も聞かずに昨日付けて解雇ですよ。狂つてますよあの社長。』

「そんな馬鹿な!』

「まだ続きがあるんですよ。立川たちへの解雇通告を聞いて自分は納得がいかなかつたのでこれは不当解雇だと社長に訴えたんです。そしたら社長に歯向かうとはいいで胸だなつていいながら自分にも解雇通告を突きつけてきました。自分はもう呆れてしましました。』

「・・・言葉もないよ。結局は俺が気にくわなかつたってことか。』

「そうみたいですね。元からあの係長の下にいた連中は休日も今までどおりで、別段強く当たられることもないよつですしお。』

「・・・まああの会社のことは忘れよう。所詮はそんな程度の会社だつたつてことや。』

「・・・品川さん。悔しくないんですか?』

「・・・悔しいけど仕様が無いだろう。次を探そう。」

「自分はこのまま引き下がることなんてできません。何とかしてあの淀川源次に一泡吹かせたいんです。」

「一泡吹かせるって言つたってどうやつて?」

「管理部の藤原って奴いるの知つてますよね?」

「ああ。藤原濶つて男か。そいつがどうした?」

「あいつ話が分かる奴でしてね。自分たちは不当解雇だつて賛同してくれたのそいつだけなんですよ。あとはみんな恐れて何も言えない中ですよ。なかなか熱い奴でしてね。しかも社長の家族となにやら付き合ひがあるらしいんですよ。」

「・・・赤坂。お前何を企んでいる?」

そこで俺は赤坂が淀川源次の息子を誘拐し、奴の慌てふためく顔が見てみたいという、とんでもない告白を聞いた。電話の用件はそれに乗るか乗らないかというものだった。立川と大田は乗ると言つてゐるらしい。俺は最初何を考えているんだという口調で赤坂をなだめたが、俺の中にも一泡吹かせてやりたいという思いがあつたのだろう、いつしか赤坂に同調するようになつていつた。

今の俺には何か起爆剤が必要だつた。この生活から抜け出したいという一心しかなかつた。革命家になつてクーデタを起こしてやろう、全ての労働者の代表となつて抗議してやろう。そんな思いに駆られていた。

『会社を変える、社会を変える。』

といつのは凄まじいエネルギーが必要だ。並のサラリーマンでは到底不可能なのだ。

だが今の俺はどうだ？

一ート同然の生活に陥れられたおかげでエネルギーは有り余つて
いる！

今の俺にならできるのではないか？

それに俺だけじゃない！

赤坂や立川や大田だつている！

藤原という心強い味方だつている！できるーー！

いや、

やるなら・・・今しかない！――！

そうだ・・・。

ずっと思っていたことじゃないか。

価値のある会社なんて一握りしかないんだ！

それ以外は「ミニ同然の企業！」

社長だけが私腹を肥やし、社員は低賃金で残業！

それが今の日本の現実！

そんな社会のどこが幸せか！

どこが平和か！

俺が社会を変えてやる！！！

革命を起こしてやる！！！

古き社会をぶち壊し、新たな社会を築くんだ！！！

俺はかつての係長に戻り、彼らを束ね、作戦会議を重ねた。個人を本名で呼ぶのは危険なのでコードネームで呼ぶこと、事前調査は入念に行うこと、連絡は常に取り合いつことなどを取り決めた。

また藤原からは、社長やその家族周辺について色々聞き出した。彼に誘拐作戦に参加するかと問うと、彼は誘拐はよくないといつて参加してくれなかつたのは残念だが、これだけ情報があれば充分だらう。

俺たち4人がいれば容易にできるはずだ！

万が一失敗したつて、これがニュースに流れるだろ？・・・。

そうすれば、どこかの企業のどこかの社員が、きっと同じことをやるに違いない・・・。

捕まつたって無駄じゃない！
これは革命のハジマリなのだから・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6969f/>

Drive

2010年12月26日22時58分発行